

至誠

明治神宮武道場
至誠館 館長 荒谷 卓



今回は戦いにおける「時」と「所」について考えていこう。

よく気が早くてすぐに戦いを挑もうとする人がいる。私も若い頃からこの気性が直らなくてよく指導を受けたものだ。自分で勝手に「今が決戦の時だ」と決めてかかってしまっているのである。これは「戦う時をわきまえない」態度だと言える。

反対に、本来「今こそ戦うべき時」なのに、戦うことのできない人もいる。大多数の人はこちらに属するだろう。ただ、全員がそうだと、その社会集団は消滅する。

戦いには相手がいる。その存在を無視しては戦いにならない。個人でも国家でも、体力差で圧倒するような発想が成立するのは、弱者を虐待するような場合だけだ。

同等以上の強力な勢力や武器をもった相手に対して体力で圧倒する。そういう大事な時に、世を正しく導く人物がいるかないかが、国の運命に大きく作用する。

人々の心、集団の心理を分析していくと、ある集団に属する人々の集中力「心のまとまり」が強い集団の方が圧倒的に有利だ、ということになる。つまり、「敵の国民・兵士の心のまとまりが強い時は、戦う時ではない」と正成は述べているのである。

こういう時には戦いを避けて、その代わり自らの国の民の心のまとまり、集中力が高まるまで、『時』を待たなくてはならない。

そしてそのためには政治・行政や経済的な政策を使って、そのような心のまとまりができるようにしなければならぬが、正成は具体的に『上のものが下々のところまで降りて行き、その辛苦を聞いて取り除いてやること』と述べている。

企業活動で言えば、戦える会社には、社員の人心を掌握し、社員の士気を高め、社内の結束力を高めることが必要になるといふことだ。

また、こちらの心のまとまりが強くなるのをただ待つだけではなく、敵側の人心を動揺させ、心の分散を図るようなきつかけとなりうるものが何かを探し、さらにそのような人心の動揺が起きるような心理的な工作活動を、この期間にやらなくてはならない。これが、『戦わずして

る」という戦術が通用するだろうか？もちろん通用しない。そうなるに、体力や技の巧妙以上に、「いつ」「どこで戦うのか」が大事になってくるのだ。

例えば、道場で稽古する場合、時と所と言っても、限られた空間で、お互いが構えた状態からはじまる。つまり、最も時間と場所が限定された条件での戦いになるので、技の有効率が高い。しかし、それであっても、踏み込むタイミング、足をつく位置が問題になる。半足ほどの足の置き方のようなちよつとした違いで、力の入り形がまったく違うことにも気づくようになる。

道場稽古で、戦いについて学ぶとすれば、時と所について、相当真剣に向き合う機会を与えてくれることだろう。だから、いくら一人でサンドバッグを叩いても習得する

勝つ」の具体策である。より具体的には、敵の将が金に執着があるならば、わが国の金持ちをその国に移住させて、金の力で籠絡させる。女性に弱い場合にはわが国の美人をその国に送って誘惑させる。趣味嗜好に傾倒する場合には、わが国の芸人たちを送りこむ。現代でいえば、映画・ゲーム・エンターテインメント等の娯楽メディアやインターネットサービスだ。このような、ある意味で謀略を仕掛けて、相手国の指導者や国民を墮落させるべきだと、正成は具体的な方策を示している。

こうした工作活動を通じて、相手の中心力を弱体化し、人々の気持ちのまとまりが崩れるように仕掛けるのである。

正成はこのように「時」を勝ち取るために、相手の心を奪う具体的な策があることを述べている。

実はこれは、まさに戦後日本が仕掛けられている弱体化状態であるともいえる。

敵中にいる味方を通じた心理戦

楠木正成が、戦力比でいえば百倍以上の敵と戦った際に、敵に糞尿や熱湯をかけるといった奇策を使ったことが知られているが、そうした奇抜な作戦だけでは戦闘に勝つことはできない。実際には、心理戦、工

作活動と同時に進めていた。彼は「敵中に味方を得る」ことを、戦いの上での最重要項目としている。このことから、彼がゲリラ戦を戦っている最中も、敵中に常に味方がいたと考えるべきだろう。その敵中に潜入させたスパイを通じて、敵の大将や兵士たちが、「直ぐにも勝てるだろう、三日もすれば相手は根を上げるに違いない」と慢心しきっている様子を知っていたはずである。そこに乗じて、敵に、「早く戦の功を上げないと戦が終わって恩賞がもらえなくなるぞ」とデマを流し、功を焦つてまとまりもなく攻撃を仕掛けてくるように仕向けていた可能性もある。敵中にいる味方を通じて、「こちらは弱くて今にも倒れそうだ」という偽情報を流しておけば、相手が功を焦って、ばらばらにまとまりをなくして攻撃してくるようになるからである。

また熱湯をかけるような戦術も、「次は一体何を仕掛けてくるか分かったものじゃない。きつと別の攻撃があるのではないか」と相手に恐怖と躊躇を呼び起こさせる作戦であり、相手の心を惑わすための心理戦としての意味合いが強かったと思われる。

そんな正成が、究極的には、人の心を管理するのは、「徳心」だと述べている点が重要だ。

「時を得る」とは人の心を読むこと

中国武経七書のひとつ「尉繚子」では「天の時、地の利は人の和におよばず」と述べている。日本的に言

えは、「天の時、地の利」は「人事」より上位にあるが、人と人の間の時、つまり人間社会の時は、人が主体的に関わることができ、また、人の心が和せば「時」を得ることができるといふのであれば正しい。

楠木正成は、「人を知るは武の肝要なり」と、時を観るのに「人の心」に着眼した。特に、人に関しては、我も人・敵も人、夫々の人の心がどう動くか。多勢でも心がまとまらなければ烏合の衆。少数でも一致団結していれば精強なる軍。それを決めるのは、中核となる人物。大楠公遺訓にも「人を求めるに、心徳を求めよ、位形を選ぶことなかれ」と記している。

国民の心が一つにまとまる「正の時」、あるいは、国民の心が分散しまとまりがなくなった「負の時」。この時が、国家社会の大転機の時となる。

要するに兵士たちが報酬＝金のために戦うのではなく、共感できる大義や信頼できる大将のために戦うことの方が、はるかに心のまとまりが強く強大な力となる。

「敵も人、味方も人。人は心。天の理、地の利を体して、心を持って敵の心を奪う」といふのが楠正成の戦の考え方。劣勢の側の勝利は、味方の団結はもとより、敵を味方にしてこそ成り立つというもの。

例えば中国人はすべて中国政府のためにだけしか働かないのかと言ふとそうではない。日本人も日本のためにだけしか働かないのか、というと必ずしもそうではない。そこ目をつければ、敵側にいた人が味方になる「時」もあれば、味方の人間が敵になってしまふ「時」もあるということになる。

およそ、統治の名将と言われている人たちは、道徳を持って部下を収め、策略や謀略に優れた者は側近として置いていたとしても、将はあくまでも徳のある人物でなければならぬ、と説いている。

これは自分たちの心のまとまりを失わないために不可欠だけでなく、戦いが長引けば長引くほど、敵の兵士たちまでも、「あの大將の下で戦いたい」と思わせ、相手の心のまとまりを崩す効果を持つようになる、と正成は述べている。

「時を得る」とは人の心を読むこと

中国武経七書のひとつ「尉繚子」では「天の時、地の利は人の和におよばず」と述べている。日本的に言

隔月刊国際情報誌グローバルヴィジョンのご注文、定期購読は下のハガキを切り取ってご利用ください。(50円切手をお貼りください)

隔月刊国際情報誌
グローバルヴィジョンの
バックナンバー →
バックナンバーは全て500円(税込)です。
お届けの際に郵便振替払込用紙を同封いたしますので、郵便局にてのお支払いをお願いいたします。



2013年5月号
新防衛大綱と日本の対中防衛戦略
アルジェリア・テロと海外法人企業の危機管理
蚊帳の外に置かれ続けた日本外交
米中ハワード・ランジション期における日本の大戦略



2013年3月号
安倍新政権と日本外交の落とし穴
第二期オバマ政権指導!!
検証!北朝鮮の弾道ミサイル開発
リビア米領事館襲撃事件と民間軍事会社



2013年1月号
石破茂・自民党幹事長インタビュー
2013年世界の指導者はど動くのか?
フィリピンからスカボロー環礁を奪った中国の手法
戦争ビジネス最前線 第2弾



2012年11月号
オバマが見捨てたアフガニスタン
米中ハワード・ランジション期の世界
広がる無人機ビジネスとその影
被災地の再生は将来の日本の行方をおよぼす



2012年9月号
ユーロ危機は「グローバル化終焉」の序章か
シリア内戦が世界大戦に発展するリスクを見落とすな
米中ハワード・ランジション期の世界
社会にかかわらうとしない若者たち



2012年7月号
オバマ「再選キャンペーン」始動
激化するオバマ「秘密部隊」の特殊作戦
「待機児童」という虚像
連載「ヒーローを求めて」



2012年5月号
南スーダンの自衛隊
米国はイランを攻撃するのか?
ミャンマーで交錯する大国の視軸
緊迫するエネルギー最前線 他



2012年3月号
米国のアジア回帰と米中対立
一触即発の「危険水域」に突入する米-イラン関係
政府が被災者の生活再建の機会を奪った!
米最新鋭無人機「撃墜」事件の真相 他

POST CARD

1 0 2 - 0 0 9 3

円切手をお貼りください

東京都千代田区

平河町一丁目9-8

GLOVAL VISION 編集部内
ご購読係 行

隔月刊国際情報誌
GLOVAL VISIONのご注文、
定期購読(2年間、1年間等)は
左のハガキを切り取って
ご利用ください。

ウラ面の必要事項を全てご記入の上
50円切手を貼ってポストに投函してください。
ご注文のグローバルヴィジョンを
お送りいたします。
ご購入料金は郵便振替払込用紙を
同封いたしますので、
郵便局にてのお支払いをお願いいたします。
(次頁にバックナンバーリストもあります)

GLOBALVISION
隔月刊国際情報誌グローバルヴィジョン

グローバルヴィジョン ご注文、定期購読用ハガキ



戦える「時」をつくる

このようなことを考えてみると、今、日本の指導者は徳のある存在か。その指導者を中核として、日本国民の心は「一団結しているのか。相対する国はどうか。今の日本は、相手国の国民が、なれるものなら日本の国民に成りたいと考えるような状態か、という点を考慮してみる必要があるだろう。
経済で国際競争力を高めるにしても、領土問題で一切の妥協はしないといったことも、こうしたことが相対的に他国に比し劣っているのでは

れば勝負にならないということも認識すべきであろう。
この原理は、テロ対策では既に国際常識化しているといっても過言ではない。イラクでのテロなどは典型的だが、本当に中核となっているテロリストたちの数は必ずしも多くはない。しかし、彼らに同情的な大衆が存在するためにその力は何十倍にも膨れ上がる。
だから、その大衆が心情的にテロリストではなく、こちら側につくような政策を取ることでテロ対策と治安回復には何よりも重要になってくる。米軍はこのことを対反乱作

戦(COIN)で理論づけているが、実践はなかなかうまくいっていない。なぜならば、米国の提示する大義と現実の社会システムが、多くの人々の協賛を得られないからだ。
楠木正成が兵力という点では圧倒的に劣勢であったにもかかわらず、巨大な相手を倒すことができたもう一つの要因は、一般大衆が心情的に好意的になってくれたことである。こうした大衆の心理、大衆の心をどのようにしたら味方につけることができるのか、自らの力に変えていくことができるのか、といった点を、現代の政治も、そしてビジネス界の指導者たちも軽視していきながら思えてならない。権力者として手を組むのは容易だが、汚い権力者と手を組めば国民の心は離れる。大衆は声には出さなくとも、そこはしっかりと見ている。

また、歴史を全否定するコミュニスト、コスモポリタンのような無国籍主義者や市場原理による自由競争を信奉する個人主義者は、土着大衆のように先祖代々その土地と共に生き、村の先祖から今いる人々総てが一つの生命共同体のような生活をしている人々の心情を理解できない。
ともすれば、自己の理論のみを正当化して、そのような古い慣習社会を破壊しようとする。土着大衆にとって、その集団は歴史的にも空間的にも一つの生命体のように一体的なのだ。その心情と価値が理解できない人間が真の平和など創造できるはずもない。自らが属する土地と集団への帰属意識を持ちつつ、他の郷に比べればその郷のしきたりを尊重する。それが、八百万の神々をいただく日本文化の歴史のかつ世界的な文化価値だ。
世界中の土着の大衆の心に敬意を払いつつ、多様な文化価値観の大同団結を戦略の土台に据えるならば、日本の国際政治力は歴史的な意義のあるものになる。国内外の停滞感の払拭は、単なるムードやとりあえずの打開策ではなく、ましてや競争による社会の分断などでなく、日本が建国以来目標としてきた、家族的世界の建築ではないのか。そこにこそ、日本の新たな方策が切り開けるのではないか。
少なくとも、戦いにおける時と所の原則から、今が戦う時なのかどうかをしっかりと考え、まずは、国民や社員の心が一つに団結する策をとるべきである。それを他国にも及ぼし、戦わずして勝つ道を探るべきではないか。